

小学校英語資料の言語材料に関する一考察 -- あい さつ表現 "How are you?" の応答を中心に --

著者	村端 佳子, 村端 五郎
雑誌名	宮崎国際大学教育学部紀要 教育科学論集
号	4
ページ	27-38
発行年	2017-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1106/00000665/

小学校英語資料の言語材料に関する一考察
—あいさつ表現 “How are you?” の応答を中心に—

村端佳子
宮崎国際大学

村端五郎
宮崎大学

Abstract

This paper considers the adequacy of language materials in *Hi, friends!* and its predecessor *English Notes* for elementary school English education with particular focus on the response to the expression “How are you?” as greeting. It is not uncommon that elementary and junior high school students respond to “How are you?” as greeting with bizarre patterns such as “I’m hungry,” “I’m sleepy,” or “I’m tired,” when we get into their English classroom as class observers. In order to find the factor of such pragmatic failure this paper first discusses how native speakers of English and advanced second language users of English respond to “How are you?” in naturalistic oral discourse. Then because of failing to find such strange greeting responses in naturalistic oral discourse, it argues that the main factor of the pragmatic bizarreness roots in *Hi, friends!* and its predecessor which have been the main teaching and learning resources for elementary school teachers and students. The paper concludes with pedagogical implications for teachers in practice suggesting the way of how they should use these language resources effectively in the English classroom.

【キーワード：小学校英語資料、言語材料、あいさつ表現 “How are you?”、児童・生徒の応答、語用の誤り】

1. はじめに

最近、小中学校で英語を学ぶ児童・生徒の使う英語表現で特に奇異に感じる表現がある。筆者らは、公開授業の際に教室に入ると “Hello. How are you?” と近くの児童・生徒に声をかけることがよくある。そこで児童・生徒から返ってくる応答の大半が、“I’m tired.”とか “I’m hungry.” あるいは “I’m sleepy. And you?” などというものなのである。ほとんどの場合、筆者らとは初対面の児童・生徒である。英語で応じてくれるのは好印象をもつが、どうも妙な感じがしてならない。

もちろん相手の体調や気分を気遣って、「調子はどうですか?」という文字通りの意味での“*How are you?*”に応じるのであれば“*I'm tired.*”“*I'm sleepy.*”などにはまったく違和感はない。しかし、あいさつ表現としての“*Hello. How are you?*”に対して、“*I'm sleepy.*”“*I'm hungry.*”などと応じるのは、適切な表現とは言いがたいのではないだろうか。教師の中には、子どもたちが自分の体調や気分によってそれぞれ違った表現を選択して応答することが自己表現の機会になると考えている人たちが多くいるという指摘もある(新里, 2008)。

本論では、まず、英語母語話者はあいさつ表現としての“*How are you?*”に対して一般的にどのような応答表現を使用するのか、英語を第2言語として学ぶ上級の英語ユーザは、どのような応答表現を使用するのか、を明らかにする。そして結論として、このような奇異に感じられるあいさつ表現の応答の主たる要因は、現在小学校の教育現場で活用されている『*Hi, friends!*』とその先行資料の『英語ノート』である可能性を示す。最後に、このような小学校英語用資料を教育現場では、どのように活用していけばよいのかを提案する。

2. あいさつ表現“*How are you?*”に対して“*I'm sleepy.*”と応答することの問題点

あいさつ表現としての“*How are you?*”という表現は、一般的に言えば、相手の健康状態に関心のあることを伝えるために使用されるわけではないため、多くの場合、聞き手は健康状態を詳しく説明してほしいから尋ねているとは考えられていない(Applegate, 1975; Barraja-Rohan, 1997; Wolfram, 2016)。Wolfram(2016)は、あいさつ表現や暇乞いの表現は文字通りに解釈されるのではなく、型通りで儀式的なものであるとして、以下のように述べている。

Conventions for greeting and leave-taking, which involve ritualized forms not to be interpreted literally, can also be sensitive to language variation. In most cases, greeting routines simply involve rote memorization of a limited set of formulaic exchanges and an understanding of the appropriate circumstances for their use. . . . [S]peakers learn to respond to the greeting “What’s up?” with “Not much,” even if they are undergoing dramatic, life-changing experiences, just as they learn to reply to “How ya doing?” with “Fine,” even if they are currently suffering intense emotional turmoil. (p. 90)

たとえ人生の大転換となる経験をしていたり、深刻な情緒不安で悩んでいたりしていても、“*How are you?*”あるいは“*How ya (are you) doing?*”と相手から声をかけられると、単に“*Fine.*”と応答するのが通常であるというのである。

したがって、相手の体調を気遣っての“*How are you?*”ではなく、単なるあいさつ表現としての“*How are you?*”に対して“*I'm sleepy.*”などと応じられると奇異に感じるのである。最悪の場合、否定的な感情や含意を相手に与えてしまいかねない。例えば、こんな逸話がある。ある大学の英語の授業で英語母語話者の教師が“*How are you?*”とある学生に声をかけたところ、その学生は“*I'm sleepy.*”と応じたという。するとその英語ネイティブ教師はものすごい剣幕で“*Get out!*”と学生を叱ったそうである。学生の応答は、ある意味では「あなたとはあまり話をしたくない」「何となくやる気がしない」などを暗示する表現とし

て相手に悪印象を与えてしまいかねない。この場合は、その英語ネイティブ教師は学生の応答を「あなたの授業はあまり受けたくない」という意味に取ってしまったのかもしれない。

たかがあいさつ表現をそれほど深刻に問題視する必要はないと思う人もいるかもしれない。しかし、このような語用の適切さに関わる問題は、上の大学生の場合のように、時として相手に不快な印象を与えてしまう危険性があるということも頭に留めておく必要がある。一般的に言えば、母語なまりの第2言語としての英語や多少文法ミスのある中間言語よりも、語用に関わる中間言語誤用はより深刻な場合が多いのである(清水, 2009; Rose & Kasper, 2001; Thomas, 1983)。もちろん、私たちが主張したいのは、日本人は英語母語話者並みの、完璧で正しい英語を使えるようならなければならない、ということではない。そもそも、そのような目標を立てても到底到達できるものではないことは明らかである(村端・村端, 2016; Murahata, 2012)。あいさつというのは、出会えたこと、再会できたことの喜びを相互に伝え合い、相互の存在を認めて人間関係を築き、維持するために重要な役割を果たすものである。そのため、特に出会ったときのあいさつでは相手に奇異な印象を与えてしまってはならないのである。

そもそも、あいさつ表現としての“*How are you?*” (ごきげんいかがですか?) は、それに対して“*How are you?*” で応じる英語母語話者も少なくないことからわかるように、見かけは疑問文の形をしているが、相手から何らかの論理的な答えを期待して発する問いではない(Richards, 1980)。病院に電話をして診察の予約をする際に、病院関係者の“*How are you today?*” という体調を気遣う文字通りのまじめな質問に対しても“*Fine.*” などと無意識的に応答することもあるくらいである(Applegate, 1975)。さらに、イギリスでは、“*Cold, isn't it?*” と相手からことばをかけられると、“*Yes, isn't it?*” “*Mm, very cold.*” などと同意の応答をするのがエチケットで、“*No, actually, it's quite mild.*” などのように論理的に応答すると雰囲気が一変して緊張が走ると言われている(Fox, 2008)。このような儀式的な表現が求めているのは、‘a social response’ であって、‘a logical answer’ ではないのである(Fox, 2008, p. 29)。

日本語のあいさつ表現にしても同様のことが言える。例えば、「おでかけですか?」と近所の人に声をかけながらも、実際にその人がどこに行くのかを詳しく知りたいわけではない。返答は「はい、ちょっとそこまで」「はい、いろいろ用事がありまして」などと答えれば十分である。大切なのはことばを交すことであって、どこに行くのかを問題にしているわけではないのである。

もう1つの問題点を指摘しておこう。小学校英語の成果を探るため、中学校入学時の中学1年生 279 名に英語コミュニケーション能力を図るテストを実施し、その結果を報告した論考(高橋・柳, 2015)がある。そのテストには、ALT が録音した以下の7つの「自分のことを答える」質問に英語かカタカナで書いて答える問題が含まれている。

- ① (教師の音声) Hello. How are you?
- ② (教師の音声) Do you like apples?
- ③ (教師の音声) What color do you like?
- ④ (教師の音声、リコーダー等の一部を見せて) What's this?
- ⑤ (教師の音声) Do you have notebooks?
- ⑥ (教師の音声) Can you swim?
- ⑦ (教師の音声) What time do you get up?

採点者は、以下の採点基準を設定して採点を行っている。

- 1) コミュニケーションを図る内容について、英語でほぼ書けている (5点)
- 2) コミュニケーションを図る内容について、英語とカタカナで書けている (4点)
- 3) コミュニケーションを図る内容について、カタカナで書けている (3点)
- 4) カタカナで、答えている (2点)
- 5) 無回答。誤答。(1点)
- 6) 答え方の方法が違っている (0点)

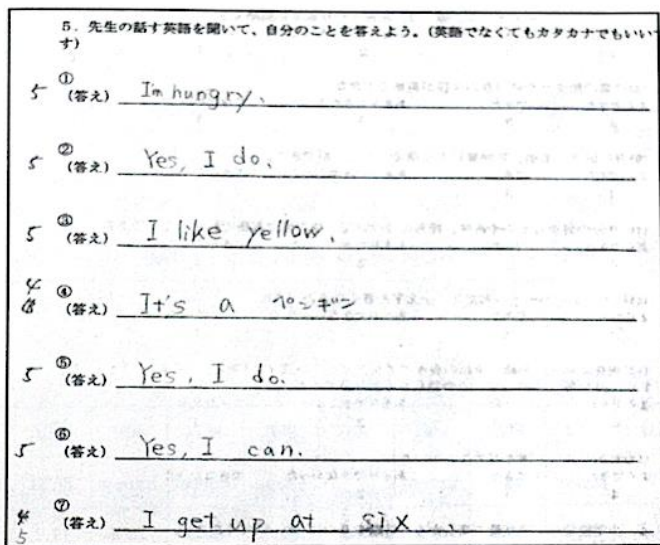


図1 “Hello. How are you?” に対する生徒の回答例 (1) (高橋・柳, 2015, p. 15)

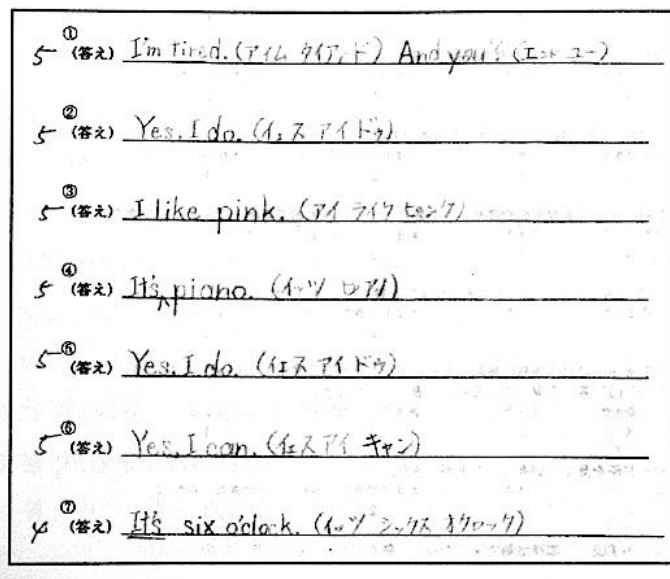


図2 “Hello. How are you?” に対する生徒の回答例 (2) (高橋・柳, 2015, p. 16)

全体の平均点は 3.23 点であったが、ここで問題とすべきなのはその平均点ではなく、「① (教師の音声) Hello. How are you?」に対する実際の生徒の回答例である。1つは「I'm hungry.」(図1参照)で、もう1つが「I'm tired. (アイム タイアード) And you? (エンド ユー)」(図2参照)である。2つの図にあるように、採点者は、これら2つの回答に対してそれぞれ満点の「5点」を与えている。つまり採点者は、「I'm hungry.」と「I'm tired. (アイム タイアード) And you? (エンド ユー)」を「Hello. How are you?」に対する適切な応答と認めているのである。しかし、このような評価基準は、語用論の観点からみればきわめて重大な問題をはらんでいると筆者らは考えている。なぜなら、「Hello.」で始まっていることから明らかなように、後続の“How are you?”は、あいさつ表現と考えるとよいだろう。それに対しての「I'm hungry.」「I'm tired. And you?」という応答には大きな違和感を感じざるを得ないからである。それを満点と評価することは、場面に合った本物のコミュニケーションという流れから大きく外れてしまう。この点に関して新里 (2008) も次のように指摘している。

たとえば、「How are you?」という表現がある。これが普通の挨拶であれば、「Fine, thank you. And you?」で応答すべきだろう。これに「I'm sleepy.」とか「I'm hungry.」と答えさせるのは不自然である。一人ひとりの子どもの体調を聞いている場面ではないからである。先生方の中には、子どもたちが自分の体調や気分によってそれぞれ違った表現を選択して応答することが自己表現の機会になると考えている方々が多くいる。しかし、挨拶は挨拶であって、それに対して「I'm tired.」と返答されたら、普通は面食らってしまう。つまり、この答え方は挨拶としては不自然なのだ。(p. 2)

3. 英語母語話者と上級英語第2言語ユーザの応答パターン

3.1 英語母語話者の応答パターン

では、英語母語話者は実際どのような応答をするのだろうか。Kakiuchi (2005) は、60名のアメリカ英語の母語話者(20代から50代までの大学院生、教授、事務職員)による60セットのあいさつを録音し、そこでみられる表現を26のパターンに分類した。表1は、その結果を示している。

表1 英語母語話者によるあいさつ表現のパターン (Table 1 (Kakiuchi, 2005, p. 67) に基づき一部改変)

パターン	頻度 (%)	発話例
1)	19 (32)	S: Hi. R: Hi.
2)	2 (3)	S: Hi. R: Hi. S: How are ya?
3)	3 (5)	S: Hi, (Name). R: Hi, (Name). S: How are you? R: Good. How are you?
4)	1 (2)	S: Hi, (Name). R: Hi, guys. S: What's up? ...
5)	1 (2)	S: Hi, (Name). S: How are you? R: I'm OK. How are you? S: I'm OK.
6)	1 (2)	S: Hello. R: Hello. How are you? S: Good.
7)	4 (7)	S: Hey. R: Hi. How are you?
8)	2 (3)	S: Hi. R: Hi, (Name). How are you? S: Fine. You? R: Fine.
9)	1 (2)	S: Hey! (Name)! R: Hey! What's up? ...
10)	1 (2)	S: Hi, (Name). R: How are you? S: How have you been? R: Great. How are you?

11)	3 (5)	S: Hi. R: What's up?
12)	3 (5)	S: Hi, (Name). R: How are you, (Name)? S: Good.
13)	1 (2)	S: Hi, (Name). R: How ya doing? S: Fine. How about you? R: Not much.
14)	3 (5)	S: Hey. R: [Smiling].
15)	1 (2)	S: Hey. R: [Kissing her]. S: How are you? ...
16)	2 (3)	S: Hey, (Name). How are you? R: Hey.
17)	1 (2)	S: Hey, how are you? R: Hi. S: Nice to see you again.
18)	1 (2)	S: Hey, (Name). How you doing? R: Hi, (Name). S: What's happening?
19)	2 (3)	S: Hi, how are you doing? R: Good.
20)	1 (2)	S: Hey, how are you? R: Ok [sic]. You? S: Good.
21)	1 (2)	S: Hey, (Name). What's up? R: What's up? ...
22)	1 (2)	S: (Name), how ya doing? R: Good.
23)	1 (2)	S: (Name), how's it going? R: Pretty good. How about you?
24)	2 (3)	S: How are you? R: Hey.
25)	1 (2)	S: [Waving a hand]. R: Morning!
26)	2 (3)	S: [Waving a hand + smiling]. R: [Waving a hand + smiling].

S: Speaker (話者); R: Receiver (応答者)

筆者らは、これら 26 のパターンのうち、“How are you?” が出現しているものをさらに抽出してみた。以下がその結果である。あいさつ表現としての“How are you?” は 10 パターンの中でみられ、出現頻度総数は 16 であった。S は話者を、R は応答者を表している。斜体部は、話者、応答者のいずれかの、相手の“How are you?” に対する応答を示している。また、() 内の数字は、出現頻度を表している。

- 3) S: How are you? R: *Good*. How are you? (3)
- 5) S: Hi. R: Hi, (Name). S: How are you? R: *I'm OK*. How are you? S: *I'm OK*. (1)
- 6) S: Hello. R: Hello. How are you? S: *Good*. (1)
- 8) S: Hi. R: Hi, (Name). How are you? S: *Fine*. You? R: *Fine*. (2)
- 10) S: Hi, (Name). R: Hi. How are you? S: *How have you been?* R: Great. How are you? (1)
- 12) S: Hi, (Name). R: How are you, (Name)? S: *Good*. (3)
- 16) S: Hey, (Name). How are you? R: *Hey*. (2)
- 17) S: Hey, how are you? R: *Hi*. S: Nice to see you again. (1)
- 20) S: Hey, how are you? R: *OK*. You? S: *Good*. (1)
- 24) S: How are you? R: *Hey*. (1)

5) について言えば、1度のあいさつにて“How are you?” が2度出現しており、また、表1の8)と20)の“You?”を“How are you?”の短縮形と考えれば、出現頻度総数は20となる。結果として、応答部だけのパターンを整理すると以下のようになる。

- a) Good. (8)
- b) I'm OK. (2)
- c) Fine. (4)
- d) How have you been? (1)
- e) Hey. (3)
- f) Hi. (1)
- g) OK. (1)

これらのデータが示すように、あいさつ表現としての “How are you?” に対して “I'm hungry.” “I'm sleepy.” “I'm happy.” などという応答はまったくみられない。また、興味深いのは、5) 7) 8) (合計頻度4回) のように、“How have you been?” と疑問文で応答したり、単に “Hey.” や “Hi.” の間投詞で応じたりするケースもあることである。したがって、Richards (1980) が述べているように、“How are you?” というあいさつ表現は、見かけ上は疑問文ではあるが、相手に何らかの具体的な内容を返す問いではないと言える。

3.2 上級英語第2言語ユーザの応答パターン

さらに Kakiuchi (2005) は、米国在住の日本語と韓国語を母語とする 19 歳から 50 歳代の大学院生で、少なくとも本国での中等教育レベルにおいて 6 年間の英語学習経験のある 51 名の英語を第 2 言語とする英語ユーザが、25 名の英語母語話者と出会った際のあいさつ表現を録音して、そこにみられるあいさつとその応答パターンを調査した。その録音書き起こしの中には、以下に示すように、英語母語話者に “How are you?” と声をかけられる場面が 4 パターン 16 回あった。

- 1) S: Hi. R: Hello. How are you? S: *Good.* (2)
- 2) S: Hi. R: Hello. How are you? S: *I'm fine. Thank you. And you?*(2)
- 3) S: Hi, how are you? R: *Fine. Thank you. How about you?*(1)
- 4) S: How are you? R: *Fine. Thank you.* (11)

1) と 2) では、S が英語第 2 言語ユーザで、R が英語母語話者、3) と 4) では、R が英語第 2 言語ユーザで、S が母語話者である。“How are you?” に対する、これらの英語第 2 言語ユーザの応答パターンを整理すると、以下のようになる。

- a) Good. (2)
- b) I'm fine. Thank you. And you? (2)
- c) Fine. Thank you. How about you? (1)
- d) Fine. Thank you. (11)

いずれも中学校の英語教科書にみられるようなオーソドックスな儀式的な表現で、ここでも “I'm happy.” “I'm sleepy.” などという奇異な応答はまったく見られない。

4. 奇異な応答の要因を探る

4.1 『英語ノート』及び『Hi, friends!』に収録の活動

それでは、いったいなぜ現在の児童・生徒は、“I’m sleepy.” “I’m hungry.” などのような応答をするのだろうか。また、中学校1年生の“Hello. How are you?” に対して “I’m tired. And you?” を満点とする上記の採点者に見るように、なぜこのような応答が認められてしまうのだろうか。その語用の誤用とも思える言語使用を誘発する要因（源）を探ってみよう。

なぜあいさつ表現としての“How are you?” に対して “I’m sleepy.” “I’m hungry.” を認めるのか、その要因を探り当てる1つの大きなヒントになるのが現場教師の声である。本論冒頭で示した新里（2008）の指摘にもあるように、“How are you?” があいさつ表現であることを知っていたとしても、その一方で、児童・生徒が自分の体調や気分によってそれぞれ違った表現を選択して応答することが彼らの自己表現の機会になると考えている現場教師の声も少なくない。また、なぜそのような応答を認めるのか、という私たちの問いに対する現場教師の生の声がある。「“How are you?” に対する応答は、“I’m sleepy.” “I’m hungry.” などと『Hi, friends!』に書いてありますよ。」というものである。

そこで、文部科学省が、平成 21（2009）年度より希望する全国の小学校（5・6年生）に配布していた『英語ノート』と平成 23（2011）年度から全国すべての小学校（同じく 5・6年生）に配布している、『英語ノート』の後継資料『Hi, friends!』を精査してみた。

まず、平成 21（2009）年度から配布の『英語ノート』の Lesson 2 「I’m happy. ジェスチャーをしよう」で提示されている活動内容をみると、冒頭には「Let’s listen CD を聞いて、ふさわしい表情の□に番号を書こう」（p. 10）という活動がある。様々な表情をした4人の子どもの挿絵があり、CD からは、“Hello. How are you?” “I’m hungry. / I’m happy. / I’m sleepy. / I’m fine.” という音の流れ、各イラストの表情に合わせて番号を□に書き込むというものである（図3）。



図3 「CD を聞いて、ふさわしい表情の□に番号を書こう」（『英語ノート』 p. 10）

さらに、「Activity ②」(p. 15) では、活動の説明書きに「みんなとあいさつをして、だれがそのような様子か、下の表に○を書こう。」というのがある。「様子」には、冒頭の4人のイラストが入れられている。このような活動を通して英語でのあいさつ表現を経験すれば、あいさつ表現としての“How are you?”と体調や様子をたずねる“How are you?”を混同しかねない構成となっている。

『英語ノート』の後継資料である『Hi, friends! 1』のLesson 2「I'm happy.」(pp. 8-9)の冒頭にも、「だれがそんな様子か、線で結ぼう」という聞き取りのタスクがあり、基本的には『英語ノート』での提示内容と大差はない。Sakura、Ai、Taku、Hikaruの4人のイラストがあり、その下に様々な表情(hungry、happy、sleepy、great、tired、sad)をしたイラストが6つ用意されている。英語音を聞いて、だれがどんな様子か線で結ぶタスクである。次の課題は「Let's sing 'Hello Song'」(p. 8)である。この歌の歌詞では、“Hello, how are you?” “I'm good.” “I'm good, thank you.” “And you?”とあり、英語でのあいさつの一般的なやりとりが含まれている。しかし、次ページの学習課題では、「ジェスチャーをつけてあいさつしよう。友だちはどんな様子か、友だちの名前を書こう。」という活動が用意されており、友だち同士で“How are you?” “I'm hungry.”のようなやり取りを想定したタスクになっている。このような流れで活動を続ければ、あいさつと体調をたずねる表現を区別できずに、“How are you?”とあいさつを向けられると、“I'm sleepy.”と応じる児童・生徒がいても不思議ではない。この資料を実際に使用して小学校英語を実践している現場の教師に聞いてみたが、予想通り、あまり使用場面を意識せずに“How are you?”を指導、また教師自身も使用しているということであった。

4.2 『英語ノート』『Hi, Friends!』前世代の英語第2言語ユーザに対するアンケート調査

そこで筆者らは、児童・生徒たちの奇怪な応答の原因の1つがこの『英語ノート』『Hi, friends!』にある可能性を確認するため、それらの資料を使用したことのない世代の国立大学教育学系学部の大学1年生38名に対して“Hello. How are you?”にどう応じるかに関するアンケート調査を実施した。調査に参加の大学生は、1996年生まれなので、『英語ノート』が配布開始となった平成21(2009)年には、彼らはすでに中学生(3年生)になっている。したがって、『英語ノート』前世代と言ってよいだろう。調査は、2015年7月に実施した。アンケートは以下に示すように自由記述方式を採用した。

A: Hello. How are you?

B: _____

あなたがBであれば、Aのあいさつにどう応じますか。下線部に英語表現を書いてください。

表2は、その結果を示している。13パターンが抽出された。調査の結果、一番出現頻度が高かったのは、“I'm fine. Thank you. And you?” ([12] 31.6%)で、次いで“I'm fine. Thank you.” ([6] 15.8%)、“I'm fine. And you?” ([6] 15.8%)、“I'm fine.” ([4] 10.5%)であった。

表2 『英語ノート』前世代の英語第2言語ユーザの“How are you?”に対する応答パターン

No.	応答表現	[] = 度数、() = %
1	I'm fine. Thank you. And you?	[12] (31.6%)
2	I'm fine. Thank you.	[6] (15.8%)

3	I'm fine. And you?	[6] (15.8%)
4	I'm fine.	[4] (10.5%)
5	I'm fine. Thank you. How about you?	[2] (5.3%)
6	Fine. Thank you. And you?	[1] (2.6%)
7	I'm good. And you?	[1] (2.6%)
8	I'm good. Thank you. How about you?	[1] (2.6%)
9	Good. How about you?	[1] (2.6%)
10	I'm so bad.	[1] (2.6%)
11	I'm so tired.	[1] (2.6%)
12	I'm hungry... And you?	[1] (2.6%)
13	I'm sleepy.	[1] (2.6%)
Total		[38] (100%)

表2が示すように、「I'm so bad.」「I'm so tired.」「I'm sleepy.」「I'm hungry... And you?」など、あまり一般的でない応答を回答した参加者もそれぞれ1名、計4名いた。しかし、それ以外の34名(89.5%)の参加者は、「Fine」あるいは「Good」を使った一般的な応答を回答したことに注目したい。出現頻度が一番高かった「I'm fine. Thank you. And you?」という応答が、現在どの程度、実際の英語で使用されているかは定かではないが、表1で示した英語母語話者の応答パターンを振り返ってみても、「Good」や「Fine」を使った表現は比較的多い。したがって、本調査の参加者の応答パターンは、それほどめずらしいものではなく、少なくとも相手に対して奇異な印象を与えたり、社会的にネガティブな応答につながったりすることはないだろう。

『英語ノート』『Hi, friends!』前世代の英語第2言語ユーザの英語でのあいさつにはあまり大きな問題は見られないというこの調査結果から次の推論を導くことができる。すなわち、現今の児童・生徒の間で広まっている、「How are you?」に対する奇異な英語が広まっている大きな要因(誤用の源)は『英語ノート』『Hi, friends!』に掲載の活動にある、ということができる。もちろん、この因果関係に結論を出すには、これらの小学校英語の授業用資料を使用した現世代の応答パターンについても本格的な実証調査をする必要はある。しかし、間もなく小学校英語が教科化され、教科としての小学校英語に教科書が用意されるということもあり、子どもたちが直に触れる資料や教科書でのあいさつ表現の扱い方については慎重かつ早急に再検討すべきであろう。

誤解のないよう付言しておく、英語母語話者の語用スタイルあるいは語用のルールが正しく、英語を学習している以上、児童・生徒は、日本文化特有の表現方式を完全に捨てて、英語母語話者のような言動をしなくてはならない、などと言っているわけではない。大切なのは、まずことばによるコミュニケーション場面においては、文字通りの意味でやり取りされる場合も当然あるが、あいさつや会話の切り出し、幕引きなどの場合には、文字通りの意味がほとんど消えた常套的な慣用表現によってやり取りが行われる、という認識を児童も教師ももって実際のことばのやり取りの経験をすべきなのである。このような認識をもった上で、目標言語文化の標準的な語用パターンを1つの選択肢として身につける努力をすることである。語用パターンの違いを知らずに、無意図的ながらも相手に不愉快な思いをさせたり、戸惑いを与えたりするような語用の「誤用」を冒すことは避けたいからである。このような認識の背景に

あるのは、文法上の誤りを冒した場合、それは第2言語ユーザとしての言語能力の不十分さを示しているだけだが、語用パターンの誤りを冒した場合は、それは人間としてのあり方を不正確に反映してしまうこともある(Thomas, 1983)という主張である。つまり、語用レベルの誤りは、コミュニケーション上、人間性に関わる大きな誤解を与えてしまいかねない危険性があるのである。

英語教科書であっても、『Hi, friends!』のような授業用資料であっても、様々な制約の上で編集されている。したがって、それらを授業で効果的に活かすには、あくまでもそれらは素材であって、それらそのものを教えるのではなく、それらを活用して自ら設定した授業目標の到達を目指していくという姿勢が何よりも大切なのである。さらに、小学校英語に携わる教師であれば、英語という言語の本質、英語という言語でのコミュニケーション活動の展開方法にも常に注意を向けていかなければならない。本論で議論してきたように、たかが“How are you?”の応答であっても、コミュニケーション場面によっては相手の体調を気遣う機能をもつ表現となったり、またある時には社会的な絆を堅固に結ぶあいさつ表現となったりするのである。教師は、「どのように教えるか(How-to-teach)」という英語の指導法にばかり注力するのではなく、たとえ言語的には同一の表現であったとしても場面に応じて社会的な意味や機能的な意味が変化することにもっと注意を払い、「何を教えるか(What-to-teach)」という内容論にも心を砕きながら、利用できる教科書や資料を十分に研究した上で、それぞれに与えられた授業用資料を活用していく姿勢をもつことが大切なのである(村端・村端, 2017)。

5. おわりに

これまでのわが国の英語教育では、英語の形式的指導に重点をおき、機能的な意味や社会的な意味にあまり注意を払ってこなかったように思う。本論で検討してきたように、英語を使用する際には、“How are you?”を「ごきげんいかがですか?」のように、単に字義的な意味で言語表現を解釈してもコミュニケーションは成立しない場合が少なからずあるのである。言語形式を習得するというのは、辞書の項目や表現を単に記憶することではなく、その形式を相手に応じて、適切な場面で、適切な表現を使用できることでなくてはならない。これからの英語教育では、この語用的側面をもっと重視していく必要があるだろう。

そのためには、児童・生徒には、ただ単に話す機会を与えるだけでなく、本論で議論してきた隣接ペアの“How are you?”とその応答を含め、会話というものはどのように展開するのか、参加者は会話でのことばのやり取りをどのように上手くやり遂げるのか、についても学ぶ機会を用意していかなければならないだろう(Barraja-Rohan, 1997, 2011; 村端, 2018; 村端・村端, 2017)。

参考文献

- 清水崇文(2009).『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』東京:スリーエーネットワーク.
- 高橋美由紀、柳善和(2015).「中学校入学時の英語学習に対する意識及び英語能力について:小学校英語教育の成果を探る」『外国語研究』(愛知教育大学外国語外国文学研究会) 48号、1-20.
- 新里眞男(2008).「巻頭言 自然な英語を!」『小学校英語情報誌 Hello, Kids!』(開隆堂) Vol. 2-4、2.
- 村端五郎(2018).『英語教育のパラダイムシフト—小学校英語の充実に向けて—』東京:松柏社(近刊).
- 村端五郎・村端佳子(2016).『第2言語ユーザのことばと心—マルチコンピテンスからの提言—』東京:開拓社.

- 村端五郎・村端佳子 (2017). 「英語ユーザとしての小中学生のインタラクション能力を育てる非線形的循環シラバス」『宮崎大学教育学部紀要 教育科学』第 89 号、11-20.
- Applegate, R. B. (1975). The language teacher and the rules of speaking. *TESOL Quarterly*, 9(3), 271-281.
- Barraja-Rohan, A.-M. (1997). Teaching conversation and sociocultural norms with conversation analysis. *Australian Review of Applied Linguistics* 14, 71-87.
- Barraja-Rohan, A.-M. (2011). Using conversation analysis in the second language classroom to teach interactional competence. *Language Teaching Research*, 15(4), 479-507.
- Fox, K. (2008). *Watching the English: The hidden rules of English behavior*. Boston & London: Nicholas Brealey Publishing.
- Kakiuchi, Y. (2005). Greetings in English: Naturalistic speech versus textbook speech. *Pragmatics in Language Learning, Theory and Practice* (The JALT Pragmatics SIG). 61-85.
- Murahata, Y. (2012) *A study of the effects of English learning on cognition in Japanese learners of English from a multi-competence perspective*. (Unpublished Doctoral Dissertation). Newcastle University, Newcastle, UK.
- Richards, J. C. (1980). Conversation. *TESOL Quarterly*, 14(4), 413-432.
- Rose, K. R., & Kasper, G. (2001). *Pragmatics in language teaching*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Thomas, J. (1983). Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics* 4, 2, 91-112.
- Wolfram, W. (2016). Levels of dialect. In W. Wolfram & N. Schilling-Estes (Eds.), *American English: Dialect and variation*, 3rd Ed. (pp. 59-96). Malden, MA: Basil Blackwell.